Herbert V. Guenther:

The Tantric View of Life

野々目　了

一

一九一七年生れの佛教学者である著者は、一九五〇年にLucknow Universityで教鞭を執るためにインドへ赴き、一九五八年にはVaranasiにあるthe Sanskrit Universityの比較哲学科・佛教学科主任となった。その後一九六四年にカナダのthe University of Saskatchewanに招かれ、極東学科主任となって今日に至っている。著者はその間'The Life and Teaching of Naropa','Treasures on the Tibetan Middle Way'等、数多くのチベット佛教に関する著書や論文を発表しており、既に我国においても広くその名が知られているが、最近'Buddhist Philosophy in Theory and Practice'と題する著書と相前後して本書が出版された。

本書において著者が目途したものは大旨、序文等に説かれている。それによれば、従来Tantrismについて概論を述べようとすると、不充分な事実的根拠に基いている為に、概して誤りが見られがちであった。そこで著者は概論を試みる前に、各時代を通じてTantrismの発展を導いてきた基本的前提が何であるかを知らねばならないと考えた。それ故、本書に於ては土着のTibetan textsに見られるそれらの前提を取り扱うことに主眼が置かれ、Sanskrit worksやその翻訳については、その使用をできる限り差し控えるようにされている。その理由は、土着のTibetan textの中にこそ、Tantrismの根底に触れるものが含まれているという、著者の判断によるものである。しかしながら、このアプローチはBuddhist Tantrismだけを取り扱って、Hinduist Tantrismを取り扱わないという点に限界もあるが、両方を取り扱うことによって逆に混乱を生じることを避けたいという著者の意図が含まれている。

以上の点が、本書の全体を通じて流れている基本的特色である。

二

内容について、全部を紹介することはできないので、目次を全部示して本書の全体的構成を紹介しておこう。

Being——The Quintessence of Tantra
The Significance of Tantra
The Body as on-going Embodiment
The Mind and the World of Appearance
Ecstatic Bliss and Emotional Entanglement
The Way and the Apparent Eroticism of Tantrism
Symbols of Unity and Transformation

The Goal is to Be

Karmamudrā and Jñānamudrā in Art

尚巻末には、詳細な Notes、原典の Bibliography、英語・サンクリット・パーリ語・チベット語による索引が付されている他、随処に写真が挿入されている。これらの写真は'Archaeological Survey of India'からの転載もあるが、著者のコレクションも多数紹介されていて興味深い。

三

まず'The Significance of Tantra'という章では、Tantra という語の定義を示す。Tantra という語には Hinduist Tantra と Buddhist Tantra の二種があるが、西洋において Tantra という語が用いられるほとんど全ての場合に、力や性を強調した秘密の教義に関連して用いられ、Tantra という語それ自身が何を意味しているかということはあまり考慮されていない。しかしながら、この語はヒンドゥー教徒と佛教徒の間では異って用いられ、それ故に同一の語であっても両者には異った事柄を意味しているのである。けれども、従来の偏見的見解のために、或は Hinduist Tantra ではしばしば用いられるが Buddhist Tantra では用いることのない語 śakti のために、Tantrism という語はほとんど Hinduist 'Tantra' と同義語とされてしまっている。その結果、個人の成長を強調し、生命ある人間の独自性を理解しようとする Buddhist 'Tantra' についてよりも Hinduist 'Tantra' に関する方が、一般によく知られている。著者は以上のように前置きをした後、Guhyasamājatantra の

「Tantra とは continuity である。それは三種ある。(即ち) Ground, Actuality, Inalienableness である」

という説を引用して、その結果「佛教における Tantra は integration と continuity という二つの意味がある」と定義する。即ち、佛教では jñāna および prajñāna に重点を置くのであり、それは、人間の問題は jñāna の問題であると悟る結果である。そして又、その jñāna は単なる過去の記録ばかりでなく、未来の実行に向けられた現在を作り直すことである。そして、これが continuity としての Tantra である。

次に'The Body as on-going Embodiment'なる章では Tantrism に於ける身体の問題を取り扱っている。「身体」と「心」という語は、一般には心の方が高い価値を有する反対概念と考えられているが、Tantrism では身体と心とは互いに依存し、互いに影響しているものであると考える。そして、Tantrism が身体について語る時には、実際には精神生活の伝達手段としての進行過程、或は運動性なるところの、或る組織を意味する「化身」について語ることになる。身体は化身という進行過程の最も直接的な現実化である。そして、それは bodhicitta (菩提心) と称される。しかし、それは我々の「身体」や「物質」を通じて作用する「生命力」や「エネルギー」と呼ばれるものを言外の意味として持っている。このように、Buddhist Tantrism に於ける身体と心の問題の分析は、身体

が化身であることを示しており、それによって又、身体それ自身の目ざめの表示を示している。それ故に、私の全身体的行為は同時に身体として私によって経験され、そして主観的に生かされるのである。自らを化身化し、私の身体に生命を与えるところの目ざめは、このように重要なものである。

次の‘The Mind and the World of Appearance’なる章に於て注目すべき点は、śūnyatā（空）なる語の英訳である。普通一般には‘void’或は‘emptiness’と訳されるのであるが、本書の著者は‘open dimension of Being’と訳しているのである。その理由についての詳しい説明は、註の四四（一五〇頁）に詳しい。

なお、佐々木現順博士は「人間、その宗教と民族性」（一二九～一三〇頁、清水弘文堂刊、昭和48）の中において、「空は空虚であるということと同時に凡てのものを接取しうる可能性を意味しており、空を emptiness, voidness と英訳することは空の一面しか表わしておらず誤解を招く」と述べておられる。Guenther、佐々木両博士の見解は同一の立場にあるものと考えられ、興味深い。

次に‘Ecstatic Bliss and Emotional Entaglement’の章では、Tantrism が快楽主義でなく、宗教的至福（mahāsukha）であることを指摘する。その「至福」は「涅槃」や「悟り」と同義語であり、従って至福は単なる苦の欠如態ではない。又、佛教教義の根本である「一切は苦なり」という教えも、この至福の経験によって理解さるべきものである。そして、この至福と対立する概念である「煩悩」は、至福と独立して対立するほどのものではなく、むしろ至福のゆがみ或は欠如の状態である。

次に‘The Way and the Apparent Eroticism of Tantrism’に於ては、苦の感情と成道の感覚との間、人間存在に関する虚構とその存在の目ざめとの間、に存する緊張を解決する試みが「道」と称される。このタントラ的「道」とは、感覚と霊性との統一を種々の面を浄化することによって保つ試みである。

又、男と女の間の相互作用のような複雑な状態が Karmamudrā, Jñānamudrā と称される。Padma dkap-po の解釈によれば Karmamudrā とは苦の根源を含んだ歓びを生じる女性として、Jñānamudrā は不安定ではあるが清い歓びである女性として解釈されている。一方、著者は Karmamudrā を外面的、Jñānamudrā を内面的と考える。

次に‘Symbols of Unity and Transformation’では、Tantrism に於て、統一のシンボルとして、何故セックスが示されるかという点について詳しく論及している。熟練された統一は Mahāmudrā と称され、この思想でもって我々は Tantrism のまさに核心に至るわけである。従って、この中心問題を把捉することなくして Tantrism を語ることは全く意味のないことである。

次に‘The Goal is to Be’なる章に於ては、「慈悲」と「空」という二つの key-terms は佛教に於ける essence であるが、特に Buddhist Tantrism に於ては重要であることが説かれる。又、「慈悲」という思想は、Tantrism における倫理的原理の

基礎である。

そして最後の‘Karmamudrā and Jñānamudrā in Art’なる章では、本書の各処に挿入されている十六枚の写真の解説がなされている。

四

以上、本書の叙述を略記したが、本書は冒頭にも述べたように、Buddhist Tantrism の基本的問題を精密に研究、解明することを目標としている。そのことは本書が常に原典によって忠実に解釈を進めていることによって知られるのである。この方面に興味のある方は是非一読の価値ある論文と信ずる。

本書は又、詳しい註や、各言語による索引等が付されていて、こまかな点にまで読者への配慮がなされている。

(Berkeley and London: Shambala Publications Inc. 1972, pp. 168. £ 3. 75 net)